

ホーム

文学研究科の「新機軸」案と新センター構想

新センターのコンセプト

新センターが担うべき機能

多彩な研究拠点の構築を目指して

研究科プロジェクトの推進

新センター構想実現に向けて

KEY WORD集

講談本

プロジェクト概要

講談本について

吉沢コレクションの世界

〈吉沢コレクション〉受入れと整備の報告
— 搬出・搬入作業の過程

古文書

プロジェクト概要

杉本図書館所蔵「近世史資料」の主な古文書

松林伯圓講演『天保六花撰』



【冊子について】

解題：

二代目松林伯圓講演・今村次郎速記「天保六花撰」（「やまと新聞」附録、第一さつ、明治25年1月17日発行）の表紙。「天保六花撰」は二代目松林伯圓の代表作の一つ。河内山宗春とそれに関係するダークヒーローたちを六花撰に見立てた講談で、河竹黙阿弥の歌舞伎「天衣紛上野初花」（明治14年初演）はこの講談をもとにしている。速記本の初出である「やまと新聞」附録は、画像の「第一さつ」から「第六さつ大尾」までの全6冊構成。吉沢コレクションでは、現在までに、全6冊を順に綴じた合綴本が1点と、各冊バラでは、第五冊のみを欠く各1点計5点がそれぞれ確認されている。

「天保六花撰」は、新日本古典文学大系明治編『講談人情咄集』（岩波書店 2008年12月）に収録され、延広真治氏による校注で読むことができる。同書での底本は初出の「やまと新聞」附録（延広氏蔵本）であり、冒頭、解題の付記で延広氏は「底本の欠損部については、田邊孝治氏、吉沢英明氏蔵本によった」と記している。

〔奥野久美子〕

【表紙絵・絵師について】

・豊原国周（とよはら・くにちか）『天保六花撰』表紙絵（6冊のうち）

解題：

豊原国周（1835-1900）は、幕末から明治期を代表する浮世絵師。歴史画や「血みどろ絵」で知られる月岡芳年（1839-92）や「光線画」と称した清新な風景画が著名な小林清親（1847-1915）と共に“明治浮世絵の三傑”の一人とされる。師である三代歌川豊国（1786-1865）譲りの役者絵をよくした国周は後年、「明治の写楽」（小島烏水「豊原国周評傳」1931）とまで賞された似顔絵描きであり、最後の浮世絵師、そして最後の「江戸児」（「明治の江戸児」1898年『読売新聞』連載）であった。代表作は明治2年（1869）に刊行した大首絵による役者絵シリーズ（計22枚）など。

6冊より成る『天保六花撰』は鏑木清方の父・糸野採菊が創刊した『やまと新聞』の付録として刊行されたが、その表紙絵はこの講談を基に脚色された歌舞伎芝居「天衣紛上野初花」（明治14年〔1881〕3月、市村座初演）の登場人物を描いていると考えられる。左下が市川團十郎（九代目）扮する河内山宗俊、対する右上が岩井半四郎（八代目）扮する腰元浪路である。

〔菅原真弓〕

← 前の記事へ

次の記事へ →